

日本労働年鑑 第53集 1983年版
The Labour Year Book of Japan 1983

第二部 労働運動

XIII 政党

3 日本社会党

1 概況

「社公合意」〃たな上げ〃状態

一九八〇年一月、社会党はそれまでの「全野党共闘」路線を事実上変更し、「社公中軸」路線にふみきった。公明党とのあいだで「八〇年代前半に樹立が想定される連合政権」に限ってではあるが、共産党の排除を明記した連合政権構想で合意したのである。しかし「社公合意」を基盤にした社公、さらには社公民、公民の選挙協力にもかかわらず八〇年六月の「衆参両院同時選挙」は自民党の圧勝に終わり、「連合政権」の夢は遠のいた。その後、社会、公明両党とも、公的には「社公合意」の尊重をくり返している。だが、公明党は〃保革連合〃を展望し、党として安保条約の存続、自衛隊合憲論を主張するまでにいたり、「非武装中立」は非現実的であるとして、社会党に政策のいっそうの〃現実化〃を迫った。これにたいし社会党内では、「社公合意」の推進を主張する右派といえども、「非武装中立」路線の堅持をととなえており、公明党の「現実主義」路線には批判的である。大会で採択された「八二年度運動方針」は公明党を名指して批判し、大会論議では「社公合意」の破棄や凍結が主張された。「行革」や「参院選全国区改革」でも両党の方針は対立しており、「社公中軸」路線は早くも行き詰まりを見せている。

初の委員長公選で飛鳥田圧勝

八一年一二月、三回目の委員長公選がおこなわれ、飛鳥田委員長、下平副委員長、武藤政審会長の三人が立候補した。これまでの二回の公選は飛鳥田委員長のほかには立候補者はなく、第一回は信任投票、第二回は投票もおこなわれなかったから、実質的にはこれが最初の委員長公選であった。飛鳥田氏を支持したのは左派の社会主義協会(向坂派)、同(太田派)、旧三月会、それに八〇年一二月に若手の国会議員によって結成されたばかりの新生研究会であった。また、ポスト飛鳥田の有力候補と目される石橋前書記長を擁する勝間田派も最終的には飛鳥田支持にまわった。反社会主義協会派は候補の一本化に成功せず、社会主義研究会(旧佐々木派)から下平氏、政権構想研究会から武藤氏が立候補した。はじめ政権構想研究会のなかには堀昌雄前政審会長を推す動きもあった。しかし、堀氏が反協会派の一本化を条件とする一方、下平氏の立候補の決意がかたく、自派内の説得をもふり切って立候補したため実現しなかった。このため、政権構想研究会は一月二〇日の告示後に急遽武藤氏の擁立を決定、選挙は三つどもえの争いとなった。飛鳥田氏が「非武装中立、反独占民主改革という党の主体性を鮮明にする」ことを強調したのにたいし、武藤氏は「党の路線や政策に具体性を持たせ、政権担当能力をつけること」を主張した。また下平氏は「政権担当能力を秘めた活力と魅力ある政党への脱皮」を呼びかけた。投票は一二月二〇日、二一日の両日おこなわれた。有権者の九二・八%、五万七八七六人が投票、二二日に開票がおこなわれ

た。その結果、飛鳥田候補が三万九三七九票(六八・〇%)と他の二候補をひきはなして当選した。次点は武藤候補で一万四七二一票(二五・四%)、下平候補は三四二五票(五・九%)であった。各候補の府県別の得票数、得票率は後掲の第107表にあるが、飛鳥田氏は武藤、下平両候補の地元である栃木、長野の両県と右派勢力の強い大阪を除くすべての都道府県で二候補をおさえ圧勝した。

書記長人事で紛糾

委員長選で圧勝した飛鳥田氏は、「自前の執行部」づくりをめざして、八二年二月の第四六回大会にのぞんだ。政権構想研究会や旧佐々木派、さらには総評、中立労連など労働組合幹部は「挙党体制」の名のもとに主要ポストに反主流派が加わることを要求した。焦点となったのは多賀谷氏が衆院選で落選したため交代必至となった書記長人事であった。大会前の下馬評で反主流派の書記長候補にあがっていたのは、政権構想研究会の田辺誠、山口鶴男の両氏、社研の平林剛氏らであった。これにたいし飛鳥田氏は、書記長ポストは絶対にゆずれないとして新生研究会の馬場昇氏を立て、右派に対し田辺誠副委員長、平林剛政審会長、山口鶴男国対委員長、河上国際局長といった案を非公式に示して妥協点をさぐった。しかし右派は、馬場氏の党務経験のなさ、知名度の低さ、若さなどをあげて抵抗し、非議員の専従中執を除き執行部入りを拒否した。また総評幹部もこの人事に強い不満を表明した。

しかし、大会代議員の多数をおさえ、公選で全党員の七〇%近い支持を得た飛鳥田氏とその支持グループは、これらの抵抗を押し切って馬場書記長を実現した。一方、この大会では、右派が強く主張してきた「道」の見直し、中執原案どおり承認された。

役員

社会党の現在の役員のうち、飛鳥田委員長は八一年一二月の委員長公選で三選され、他は八二年二月の第四六回大会で選出されたものである。大会選出役員の飛鳥田支持グループ、反飛鳥田派別の氏名はつぎのとおりである。

〈飛鳥田支持〉

▽副委員長 石橋政嗣(勝間田派、新)、田中寿美子(無派閥、現)、▽書記長 馬場昇(新生研究会、新)、▽機関紙局長 山本政弘(社会主義協会、現)、▽企画担当中央執行委員 大塚俊雄(同、現)、▽地方政治局長 志苦裕(旧三月会、新)、▽財務委員長 山崎昇(同、新)、▽選挙対策委員長 角屋堅次郎(勝間田派、新)、▽国会対策委員長 村山喜一(同、新)、▽国際局長 八木昇(同、新)、▽中小企業局長 長谷川正三(同、現)、▽国民運動局長 館林千里(同、現)、▽政審会長 嶋崎讓(新生研究会、新)、▽教宣局長 矢山有作(同、新)、▽総務局長 加藤万吉(同、前労働局長)、▽委員長指名中央執行委員 山花貞夫(無派閥、現)、船橋成幸(同、現)

〈反飛鳥田系〉

▽組織局長 森永栄悦(政権構想研究会、現)、▽労働局長 笠原昭男(旧佐々木派、前総務局長)、▽農漁民局長 山口太郎(同、現)、▽青少年局長 深田肇(同、現)、▽企画担当中央執行委員 曾我祐次(同、現)

〈その他〉

▽国民生活局長 横山泰治(無派閥、現)、▽婦人局長 山下正子(同、現)
▽中央統制委員長 島上善五郎(無派閥、現)

なお、大会で空席のままに残された副委員長二ポストは、八二年四月の第六〇回中央委で、田辺誠(反飛鳥田、政権構想研究会、新)、小柳勇(十日会、新)の両氏が補充された。

党長老のあいつぐ死去

この一年間、社会党の長老の訃報があいついだ。すなわち、八一年七月二七日には、党顧問で元衆議院副議長の中村高一氏(八三歳)が、同八月一日には元代議士神近市子氏(九三歳)が、同十一月一三日には元代議士石田宥全氏(八〇歳)、八二年五月二三日には元党副委員長、元衆議院副議長三宅正一氏(八一歳)が、それぞれ死去した。

日本労働年鑑 第53集 1983年版

発行 1982年11月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2001年9月4日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1983年版(第53集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
